

軍 事 史 学

第47卷 第2号

卷 頭 言

帝国陸海軍の技術の先見性と展開の壮大さ 榎原伸一

帝国海軍は、ライト兄弟が初飛行に成功してから十一年後の大正三年には、輸送船「若宮丸」を世界初の水上機母艦に改造し、その八年後、世界初の小型専用空母「鳳翔」を着艦方法未確立の状態で竣工させた。また、真珠湾攻撃で空母機動部隊の有効性が実証される直前の昭和十六年十一月六日に軍令部総長から海軍大臣へ宛てた戦時艦船建造及び航空兵力拡充に関する商議の中で、兵力整備の緩急順序は①航空機、②潜水艦、③航空母艦、……、⑦戦艦、大型巡洋艦とした。海軍は大艦巨砲主義に固執し敗れたとの論が多いが、上層部にこれだけの先見性があったことは興味深い。

また、陸軍は、昭和十三年頃、陸軍科学研究所が電波による素敵の可能性に気づき電波兵器の研究を進めた。海軍は一步後れをとったが、昭和十七年ソロモン海戦で重巡「青葉」、戦艦「霧島」等がレーダー射撃の洗礼を受け、その必要性を強く認識するに至り、軍産学をあげての取組みを強めた。太平洋戦争ではその成果を十分に發揮するまでには至らなかったが、電子技術は戦後日本のお家芸になったのは周知のとおりである。

さらに、零戦、隼に代表される航空機技術、戦略ミサイル原潜の原型と言われる伊400潜等の潜水艦技術等、陸海軍は全国の英知を集めて世界の最先端にまで発展させており、当時の指導者と技術陣の先見性が窺える。

その先見性は軍事技術のみならず、建築技術にも見られた。防衛省技術研究本部艦艇裝備研究所は、海軍技術研究所（目黒）の跡地にあり、今も使用中の本庁舎及び舞鶴機関学校校舎は、当時の真島健三郎海軍建築局長が提唱した「柔構造理論」、即ち、現代の超高層建築の耐震理論の基礎である動的耐震設計法に基づき世界で最初に設計、建設された鉄骨建築である。海軍と建築技術では意外な感じがあるが、海軍は軍港建設で、基地施設はもとより、工廠を作り、水源地を作り、水道を引き、鉄道までも敷いた。まさに都市開発で、それに必要な様々な技術を外国から導入して最先端技術へ育てあげた（その艦艇裝備研究所本庁舎を解体し、跡地を売却する計画が進んでいる。残念であるが、これも時代の流れか……）。

陸海軍は太平洋戦争に敗れはしたが、我が国が戦後、焦土から復興し、経済大国になったのは単なる偶然や幸運ではなく、明治以降の富国強兵、殖産興業の担い手として奮闘した陸海軍の技術的先見性と展開の壮大さ、そして人材がその根底にあることは否定できないであろう。前回の特集号巻頭言で奈倉文二先生が述べられているように「軍事史・技術史・産業史」の相互関連的な研究が発展し、当時のみならず、現代へも影響を及ぼしている陸海軍の研究開発の足跡もさらに深く知りたいものである。

（防衛省技術研究本部艦艇裝備研究所長）